

■イブニングセミナー

関連性理論について

今井邦彦*

要旨：関連性理論の概要を述べた後、発話理解の際に発揮される複雑なメタ表示処理能力の心理学的解明、発話の暗意と高次の明意間の相違の明確化の必要性を説く。また、推論という心理的過程に関する「推論規則派」・「メンタルモデル派」の主張を吟味し、併せて両派が一致して支持しているかに見える「前件肯定式は後件否定式より容易である」との論を反証する例を挙げる。さらに、発話の暗意を汲むための日常的推論ではしばしば大胆な帰納的一般化が用いられざるを得ない事実を踏まえ、心理学も語用論も共に、演繹的推論のみならず、帰納的推論の本質解明に努めるべきであることを主張する。

神経心理学 13 ; 158-161, 1997

Key Words : 認知効果, 関連性の原理, 複雑なメタ表示, 高次の明意, 帰納的一般化
cognitive effect, the principle of relevance, complex meta-representation,
higher-level explication, inductive generalisation

I 関連性理論の概要

言語が伝達的手段として極めて優れたものであるため、言語を介した伝達とは、(1)に示したようなものであるという錯覚が長いこと人々の考えを支配してきた。

(1) 情報→話し手による言語記号化 (= 符号化) →聞き手による解釈 (= 復号)

これに対して、関連性理論 (Relevance Theory) は次のように主張する。

(2) i) 話し手は伝えたい情報のすべてを言語化するわけではない

ii) 聞き手は話し手の言語形式を復号しただけではその発話を解釈したとは言えず、復号に加え推論を働かせることにより初めて発話を解釈しうる

具体例を挙げる。学生同士の会話とってほしい。

(3) A : 今夜のコンパに出るかい？

B : 明日追試なんだよ。

(3)Bの言語形式を復号しても、得られるものは「明日何らかの科目に関する追試験が行われる」という不完全な命題でしかない。Bがたとえば心理学概論の試験に落第していたことをAが思い出し、Bが話題にしているのは心理学概論の追試験であって、Bは当然それを受けるであろうという推論をAが行えば「Bは明日心理学概論の追試験を受ける」という命題が得られる。が、これだけでは解釈は完結しない。この命題と、(4)に示した「常識」を前提とし、(5)に示した推論を行うことにより初めて(6)が把握できる。

(4) 明日追試験を受ける学生は今夜のコンパには出ない

(5) $(\forall x) (\text{MAKEUP}(x) \rightarrow \neg \text{SOCIAL}(x))$
MAKEUP (B)

$\therefore \neg \text{SOCIAL}(B)$

(ただし：MAKEUP = '明日追試験を受ける')

1997年2月28日受理

*On Relevance Theory

学習院大学文学部, Kunihiko Imai : Department of English, Gakushuin University

(別刷請求先 : 〒158 東京都大田区上用賀2-5-1-101 今井邦彦)

SOCIAL=‘今夜のコンパに出る’)

(6) Bは今夜のコンパには出ない

(6)は、(3)Bでいわば暗示されていることなので「暗意」と呼ばれる。これに対して「Bは明日心理学概論の追試験を受ける」の方は、Bの発話そのものではないが、ほぼ直接言われていることなので「明意」と言われる。両者ともに、それを得るためには推論が用いられていることに注目されたい。

(3)Bから(6)でなく、「追試用の問題を作る先生も気の毒だね」などの暗意が生まれないのはどうしてか？ 関連性理論は、これを(7)に示した「関連性の原理」に帰する。

(7) 人間の認知活動は、関連性 (relevance)

の最大化を目標とするよう性格づけられている

人は誰しも頭の中にさまざまな想定 (assumptions) を持っている。そうした想定の中には、正しいものも、誤っているものも、本人にも十分な確信が持てないものもある。こうした想定の総体をその個人の認知環境と呼ぶならば、人は誰しも自分の認知環境が改善されることを常に願っている存在であると言える。認知環境に改善・変化をもたらす情報——誤った想定を覆したり、不明確な想定を確定化したり、以前から持っていた想定と併せた推論によって新しい想定を与える情報——を「認知効果を持つ情報」と呼ぶならば、「関連性」は「認知効果を持つこと」として定義される。

認知効果には大小の差がある。「〇〇教授は本日休講」という情報よりも、「〇〇教授が他大学に転出決定」という情報の方が〇〇教授の学風を慕って入学した学生にとって認知効果は大きい。他方、分かりづらい話やまるっきり分からない話の認知効果は小さく、あるいはゼロである。そこで「関連性」は(8)に示すような二段がまえの規定を受ける。

(8) a. 情報が持つ認知効果が大きければ、それに応じてその情報の関連性は高い

b. 認知効果を得るためのコストが大きければ、それに応じてその情報の関連性は低い

発話をするということは、関連性のある情報を相手に伝えようとする意志表示であり、聞き手も、話し手の発話によって関連性のある情報が得られるものと期待する。それゆえ次に示す「関連性の原理—II」が成り立つ。

(9) 意図的伝達はすべて、それが最適の関連性を持つことを同時に伝達している

関連性の原理 I・IIに照らせば、(3)Bが(6)のような唯一的解釈を受ける理由が説明される。発話の解釈に当たって、聞き手は、頭の中の想定のうち容易にアクセスできるものと発話内容とを突き合わせることによって一つの解釈が得られたらば、その他の可能性を考えようとはしない。容易にアクセスできる想定との突き合わせから得られる解釈のことを「関連性の原理に合致する」解釈と呼ぶとすれば、(10)が成立する。

(10) 関連性の原理に合致する最初の解釈がその発話の唯一の解釈となる。

II 解釈の階層性

話し手は必ずしも常に真実を語るとは限らず、また話し上手であるとは限らない。しかしそれにも拘わらず話し手の意図は聞き手に通じ得る。上記(3)の対話で、Aがたまたま明日には追試験が一切予定されていないことを知っていたとする。とすればAにはBの発話内容が嘘であることが見抜ける。Bの情報伝達は失敗するわけである。だが、もしBが前回のコンパで醜態を演じたとか、コンパの主催団体の活動に関してやましい行いをしていることなどをAが知っているとするれば、Aには「Bは(追試という偽の口実を使って)コンパを欠席するつもりだ」という察しがつく。Bの意図伝達は成功するわけである。この場合Aの心の中には次に示す複雑な階層性を持った解釈が生じたことになる。

(11) Bの意図は[[[[Bがコンパに欠席するということを]私が考えることを]Bが望んでいる旨を]私に知らしめる]ところにある

(11)は4階のメタ表示である。アイロニー・婉曲話法・当てこすり等が絡んでいる場合は表示

の階層性はさらに増す。このような複雑な階層性を持った解釈は、ごく普通の人々が日常行っていることである。メタ表示的推論の究明は心理学に課された重要な責務である。

III 今後の課題

関連性理論はすでにいろいろな方面で注目される貴重な成果を上げており、これからも大きな成果の期待できる理論である。しかし言うまでもなく、未解決の問題を抱えていない理論はあり得ない。関連性理論に残されている課題のうち二つを指摘する。

一つは「高次の明意」をめぐるものである。上記(3)Bの代わりに「行けないんだよ」という発話が行われたとする。この発話の明意は(6)にほかならない。さらにBがこの発話をいかにも残念そうに発したとする。するとAには「Bはコンパに出られないことを残念に思っている」という解釈が生まれる。これはBの発話の「高次の明意」の一つである。一般に、明意を「発話行為的述語(“～と言う”など)」や「命題態度的述語(“～を残念に思う”など)」の目的節として使った結果得られる命題を「高次の明意」と呼ぶ。この捉え方は正しいのだが、こうすると暗意と高次の明意との区別が問題となってくる。なんらかの stipulation を行うことにより処理するのは可能だが、説明力という観点からして好ましくない。Carston (1988) は関連性の原理に則った区分法を試みているが、この趣旨を本稿の例を用いて述べれば「(3)Bから明意(4)と暗意(6)の結合した命題を得、次いでこれに(12)に示す and-elimination を適用した上で(5)の modus ponens を行うのはコストが掛かるため、関連性の原理に従う聞き手はこのような推論を行わない」とするものである。

$$(12) ((\forall x) (\text{MAKEUP}(x) \rightarrow \neg \text{SOCIAL}(x)) \wedge \text{MAKEUP}(B)) \\ \therefore (\forall x) (\text{MAKEUP}(x) \rightarrow \neg \text{SOCIAL}(x)) \\ (\text{and-elimination})$$

しかし実際には(12)の最初の2行の情報は同時に与えられるものと考えられるし、and-elimination がコストにつながるという証拠は何も

ない。このことが次の第二の課題につながる。

一般に推論とはどのような認知作用であるのか? 関連性理論学者一般が前提としている、推論の過程を「論理規則」の操作と捉える見方よりも Johnson-Laird たちの mental model 的捉えの方が真実に近いのではないか? ただ問題は数多く残っている。たとえば、「論理規則」派も mental model 派も、modus ponens より modus tollens の方が難しいと主張する点で一致しているが、我々は事柄によってはごく容易に modus tollens を行っている。「あの律儀な太郎が連絡をしてくれないからには、太郎の身に何か起こったに違いない」と考えて心配する場合や「ついに私も風邪にやられました。まあこれで私も馬鹿でないことが証明されたわけです」などの冗談がその例である。また(5)の第一前提(=4)は絶対的に正しいとは言えない。「今回は万全の準備をしたから」と考えていたり、留年を覚悟して開き直っている学生はコンパに出る可能性がある。にも拘わらず多くの場合我々は(5)の推論を行う。酒を飲むイスラム教徒も絶無ではなからうが我々はイスラム教徒をもてなすときに酒の準備は慎むし、イギリス人の中にも料理が上手な人はいるにも拘わらず、イギリス人から夕食に招かれた外国人は余り大きな期待をしない。日常的な推論・判断の中で我々は往々にして、一時的にせよ一刀両断的な「帰納的一般化」を行うのである。「推論」というと我々はとかく論理学的研究の進んでいる演繹(deduction)にばかり目を向けがちだが、帰納(induction)的思考にももっと目が行ってもいいのではないか?

参考文献

- 1) Carston R: Implicature, explicature, and truth-theoretic semantics. In Mental Representations: The Interface between Language and Reality, ed by Kempson R, Cambridge UP, 1988, pp. 155-181
- 2) 今井邦彦: 関連性理論の中心概念. 言語 Vol. 24, No. 4, 1995
- 3) 今井邦彦: 期待と効果のコミュニケーション論. 言語 Vol. 24, No. 13, 1995

- 4) 今井邦彦：関連性理論から見たウソとマコト。言語 Vol. 25, No. 3, 1996
- 5) Imai K : Intonation and relevance. In Relevance Theory : Applications and Implications, ed by Carston R, Uchida S et al, John Benjamins, (to appear)
- 6) Imai K : On the over-explicitness of some Japanese utterances. In Studies in Linguistics : For Akira Ota, ed by Ukaji M, Taishukan, (to appear)
- 7) Johnson-Laird P : Mental models, deductive reasoning, and the brain. In The Cognitive Neurosciences, ed by Gazzaniga MS, MIT Press, 1995, pp. 999-1008
- 8) Johnson-Laird P, Byrne R et al : Propositional reasoning by model. Psych Rev 99 ; 418-439, 1992
- 9) Sperber D : Understanding verbal understanding. In What Is Intelligence? ed by Khalpha J, Cambridge UP, 1994, pp. 179-198
- 10) Sperber D, Wilson D : Relevance : Communication and Cognition. Second Edition, Blackwell, 1995
- 11) Wilson D, Sperber D : Linguistic form and relevance. Lingua 90 ; 1-25, 1993

On relevance theory

Kunihiko Imai

Department of English, Gakushuin University

After an overview of the basic tenets of Relevance Theory, including in particular the Principle of Relevance, the paper advocates that full-fledged psychological investigations be undertaken into the human ability to manipulate highly complex meta-representations in verbal understanding. A need is also pointed out for a more satisfactory line of demarcation between 'implicatures' and 'higher-level explicatures' than is currently available.

The claims made respectively by the 'inference rule' school and by the 'mental model' school concerning propositional reasoning are weighed, albeit without any definitive conclusion. A few

pieces of folk psychological evidence are offered, however, which might attenuate the view that seems to be shared by both schools, namely, that modus ponens is easier to perform than modus tollens.

It is also maintained that both psychology and pragmatics should endeavour to explain the nature not only of the deductive aspects of inference but also of its inductive aspects, in particular, those sweeping inductive generalisations that frequently have to be made in everyday reasoning in order to capture certain types of utterance-implicatures.

(*Japanese Journal of Neuropsychology* 13 ; 158-161, 1997)